9．建　築　物

9－1　チセcise（家）

9－1－1　建て方と構造

家を建てる時、ロルンプヤラrorunpuyar(神窓)を上流に向けて建てる。近文では、石狩川の上流が東の方なので、神窓は、東の方にある。アパapa（戸口)は、西（下流）向きで、川に近い方に、戸口が開いている。

家には、ウラシ　チセuras cise～ウラッ　チセurat cise（笹家）と、ムン　チセmun cise（草家）がある。報告者たちの子供の頃の近文では、和人式のイタ　チセita cise（板家）であった。また、ヤラ　チセyar cise～ヤッ　チセyat cise（木の皮の家）を作ることもあった（大村ユキさんの一家が、大函付近で暮らした時)。現在の深川、納内（オサツナイ）近くの渡船場オトィポクOtoypokには、ほら穴に続く草家が建っていた。

家は、15～16年の耐久性がある。枠木は、主に、コムニkomni（ナラの木）を生木の皮をむいて、使う。

イクシベikuspe（柱）は、２尺くらいの深さに穴を堀って立てる。

カンナィkannay（天井）の下に走る横木を、イテメニitemeniと言う。屋根の横にわたす木を、サクマsakmaと言い、柳の枝を払って用いた。〔石山御夫妻、11月２日〕その上に、ウラシuras（笹）をふく。笹をふくのは、女の仕事で、その笹がふきあがった屋根を、男が柱の上にのせる。ヤラ　チセyar ciseの時、ヤラyarをふくのは、重いので、男も手伝う。〔大村ユキ氏、12月６日〕

9－1－2　屋内の構造

図25の㋑は、ロルンプヤラ（神窓）と言い、本流の上流に向かって作られる。カムイ　ノミ（神への祈り）をする時、この窓をあける。神に捧げたものが、すぐに神の所に届くようにするためである。

図25の㋺は、ロロrorで、神聖な場所である。イオマンテの時、熊の頭を置く所で、（２－３－８）子熊を飼うのも（２－２)、このロロである。ロロの席は、客が来た時、偉いエカシ（年寄り）の座る所で、炉に向かって右手から順に偉い人が座る。

図25の㋩には、猟具を置く。壁上部にチセコロイナウcise kor inaw（家を守る削りかけ)をさしておく。斜めに、クマkuma（肉干し棚）を作る。

図－25　家ciseの内部

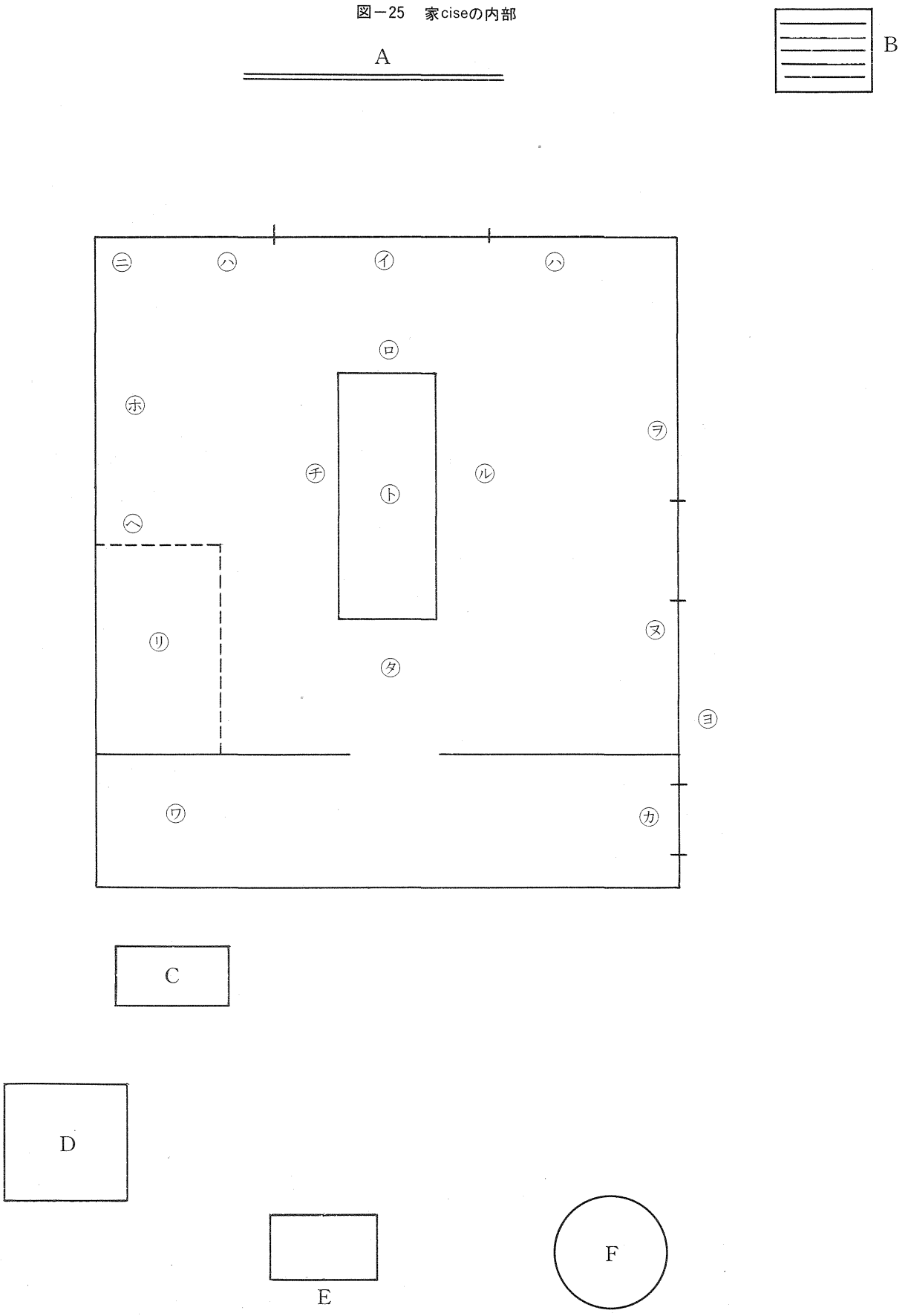


図25の㋺には、シントコなど宝物が置いてある(iyoykirイヨイキリ)。その壁に、エムシemusが掛けてある。チロンヌプcironnup（キツネ）の頭も置いてある。〔6－9－4）

図25の㋩には、イオマンテ（熊送り）の道具を置く。

図25の㋥には、トゥキ（杯）を置く。

図25の㋭は、アペ ウチape úci（火の神）のいる炉である。炉縁をイヌムベinumpeと言い、ロロからみて右隅（ロルンベ）に、アペ ウチape úciのチケ イナウcike inawをさしておく。その対隅には、ミンダラ フチmintar húciのシトゥ イナウsitu inawを置く。炉の上には、スーsu（鍋）を掛けるスワッsuwat（自在鈎）がある。このスワッは、イタヤの木で作る。下部に刻み目（タウキtawki）を付け、それで高さを調節する。スワッの上部には、ヌエnue（模様）をつける。さらに、スワッの上には、火棚（イマサンimasan、バラスッparasut）がある。火棚は、柳の細枝の皮をむいて、イリリプiririp（ハイグサ）で作ったひもで編むようにして作る。

図25の㋬は、シーソsísoと呼ばれ、チセ コロ クルcise kor kur （家の主人）が座る席である。その右手（モセムmosem寄り）は、マチmaci（女房）の座る席である。

図25の㋮は、トゥンプーtunpuで、夫婦が寝る所である。チタラベcitarpeで、すだれのように仕切りをしてある。着物なども、トゥンプーtunpuの中に入れておく。

図25の㋯は、イタンキitanki（椀）、スーsu（鍋）、ニトゥシnitus（水桶）など、炊事用具をサンsan（棚）の上に置いてある。水桶は、飲み水と洗い水に分けて置く。この水桶は、イタンキなどを洗う時にも使われる。

図25の㋰は、ハリキソharkisoと言い、ロロ寄りには、若い男の客が座る。女・子供は、戸口寄りに座る。

図25の㋱には、チタラベcitarpe（敷物）、サラニプsaranip（袋状のかご）が置いてある。

図25の㋲は、モセムmosemという。うす、きね、山からとった植物、薪などを置く。犬に食事をやる所でもある。

図25の㋳は、アパapa（戸口）である。

図25の㋴は、漁具を置く。

その他、家の外壁近くに、チセカランケプ cisekarankep と呼ぶ屋根の雪おろし具を立てかける。また、地震に備え、長い棒（タンネ ニtanne ni）を外壁に立てかけておく。

図25の㋵は、ウーサラúsarと言い、下座である。神窓に向かって右手の炉ぶちに、ウーサラフチúsar húci〔大村ユキ氏〕、または、ミンダラ フチmintar húci〔石山長次郎氏、清水キクエ氏〕のイナウを立てる。この神は、女がカムイノミしてもよい。

9－1－3　付属建築物・その他

図25のAは、ヌササンnusa san、イナウサンinaw sanと呼ばれる祭壇である。イオマンテで熊の頭を送る祭儀の場所である。カムイ カムkamuy kam（熊肉）を煮た鍋を捨てる時もこの

ヌササンnusa sanに置く（6－9－4）。

図25のBは、セッset（熊を育てる檻）。

図25のCは、織機など、女の道具を入れる小屋。

図25のDは、プーpu（倉庫）で、乾燥食物、穀物を保存する。犬が、その下で寝ていることもあり、プーの番をする。倉庫入口で、小型のクアレ ku are（仕掛け弓）を使って、ネズミとりをしたこともある〔石山長次郎氏〕。 プーのかわりに、拝み小屋のような形の倉庫を作ったことがある〔大村ユキさんが、根室標津で暮らした時〕。

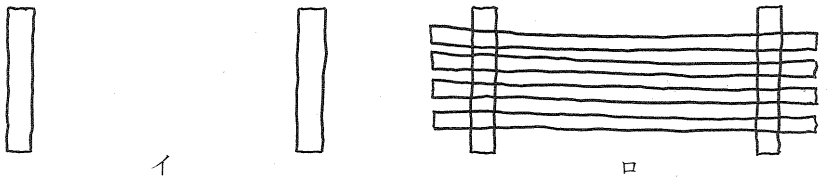
図25のEは、アシンルasinru（便所）。

図25のFは、ムルクタウシmurkutausiと言い、ごみ捨て場である。 ニスnisu（うす）を捨てる時、男がここに捨て、カムィノミをする。〔石山御夫妻、10月26、27日〕

その他、ワッカタウシ wakkatausi（水汲み場）が、近くの小沢（ポンナィponnay）にあり、そこへ下る道を、ルエサンruesanと言う（7－2）。 水は、湧き水のあるヤムワッカyam wakka（冷たい水）を選ぶ。木の枠で汲み易くすることもある〔大村ユキ氏、12月6日〕。雪をとかして水にすることはなく、冬でも沢に汲みに行く。主に、子供と女の仕事である。水を汲む時には、ラッカ rakka（沈澱させて水を澄ま）して、小さなニトゥシ nitus（水桶）ですくい、大きなニトゥシに入れ、タラtar（ひも）で背負って運ぶ〔大村ユキ氏、12月6日〕。

9－2 クチャkuca（仮小屋）

図－26 クチャの炉の作り方



春の熊猟のクチャは、沢に近い平らな所を選ぶ。最初に炉（アペ ウチape uci）を作る。雪を踏んで固める。あるいは、ノコで雪を50cmほどの深さに堀り下げる。その上に、炉台(ウプup)として、木を図26のように(図のイ－図のロの順に)並べる。その上に松葉（フプhup）を敷く。さらに、その上に沢からとってきた砂、バラスをかける。

炉ができると、小屋掛けをする。ハンの木を上で交叉させて雪にさし、ニペシnipes(シナの木)の綱でしばり、その上に松葉をかぶせる。何年もクチャを使う時は、チペレパニciperpani(割り木）を土にさし込む。松葉は、水きれがよいように、根元を上にして、地面から順に上へと重ねるようにして掛け、アッat（ニレ）の皮でしばる。入口は、沢の下流に向ける。その反対側、すなわち、上流側は、松葉をかけるが、熊を獲った時は、ここを開き ロルンプヤラ（神窓）とする。入口と奥には、股になった木を1本ずつ立て、その上に横木をわたし、その横木に二股になった木をスワッ suwat（自在鈎の鍋かけ）がわりとしてかける。

炉の周囲に、松葉を敷く。松葉は、根元を入口の方に向け、重ねるようにすき間なく並べる。

クチャの外にクマkuma（肉干し棚）を設ける。クマは、沢とクチャの間で入口寄りに作る。股になった木を二本たてゝその上に木を置く。

炉に火を起こす時は、樺皮、桂の皮、枯れた枝を燃やして灰を作る。灰ができると、枕木（エニヌeninu）を置き、薪（アペニape ni）を交叉させて組む。燃え出すと、入口に木尻を向けるようにし、入口の方から薪をくべて、炉の横からはくべない。炉縁を汚さないように、女は注意し、灰をクチャの中に捨てることもない。薪は外に置き、松葉をかけておく。

夏に鱒などの漁に行くと、クチャの屋根を蕗の葉（コロハムkorham）でふく、ヤラyar（木の皮）を使うこともあり、サロマsaroma（ぜんまい）を使うこともある。〔石山御夫妻、9月26、27日、清水キクエ氏、10月4日〕

9－3　セッset（檻）（図版 2 ）

エペレ セッeper set とか、カムイ セッkamuy set と呼ばれる。ならの木（コムニkomni）を生木で用いる。皮をむいて直径10cmほどの丸太を井桁に組む。組みはじめの床面は、地面より3尺くらい上である。7～8段に組み、上にセッ カ オ ニset ka o ni（セッの屋根にのせる木）を並べ、ふたとする。セッの前面（最下段に、大きなすき間があり、家の方に向いている面）の両端にそれぞれ1本ずつ、チケ イナウcike inaw（削りかけのついたイナウ）をしばりつける。これを、セッ コロ イナウset kor inawと言う。最下段のすき間からは、テクシニマ tekus nima（手つき盆状の器）で、子熊に食べものを与える（2－2）。〔石山長次郎氏、9月26、27日〕